

科目名	近現代日本文学特殊研究	担当者	イノウエ ケン 井上 健	期間	通年	単位数	4
-----	-------------	-----	-----------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>大正期、昭和初期の日本文学・日本文化を、ジャンル論（探偵小説ジャンルの派生）、および、アダプテーション論（文学の映画への翻案、映画と文学の相互影響関係）の視点から多様な読解を試みることを通して、1920年代、30年代のモダン日本文学の意匠と表現の新たなる位相を考察する。</p> <p>大正期からモダニズム期にかけての文芸ジャンル再編成の諸相はもちろん、探偵小説のみによって語り尽くせるわけではない。そもそも短篇小説が近代文芸ジャンルとして定着するのは、まさにこの時期であったことを忘れてはならない。他方、映画と文学のクロス・ジャンルの関わりは、この時期に発して、新感覚派、モダニズムの時代から、戦後の占領期、文化冷戦期を経由して、現代のマルチメディアの時代へと連綿と引き継がれていく。本講義で掲げる主題やテーマは、こうした少し幅広いパースペクティブのもとで考察すべきものである。</p>		
到達目標	<p>【一般目標（GIO）】</p> <p>ジャンル移入とそれに伴うジャンル再編成の、そして、異ジャンル間の交渉の諸相に着目して再読、再検証していくことによって、正典や正統的ジャンル（すなわち、私小説系の文学）に偏して考察されてきた感のある近代日本文学史・文化史の読み換え、書き換えを目指す。</p> <p>【行動目標（SB0s）】</p> <p>近現代日本における文芸・芸術ジャンル「翻訳」移入の展開を視野に入れ、ジャンル研究の方法に習熟することによって、サブカルチャーを含め、文学や文化を学際的視野から柔軟にとらえていく視点と能力を獲得する（知識・解釈）。</p>		
学修方略 （方法）	<p>【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】</p> <p>無し。</p> <p>【学修方略（LS）と学修時間】</p> <p>レポート作成による。レポート作成に要する時間は45時間とする。</p> <p>まずは、教材、取り上げる作品をきちんと精読してから、一次資料、二次資料の参照に進む。レポート作成にあたっては、「何を明らかにしたいのか」という命題から出発し、それに基づいた構成、章立てを考え、「何が明らかになったのか」が読む者に明確に伝わるように記述する。その間、履修者と担当者間で、十分な質問やコメントのやり取りがあることが望ましい。</p>		
スケジュール	<p>教材1のレポート課題(1)、レポート課題(2)の初稿提出期限は、それぞれ7月末、8月末とする。</p> <p>教材2のレポート課題(1)、レポート課題(2)の初稿提出期限は、それぞれ11月中旬、12月中旬とする。最終稿の提出期限は、前期 / 後期締切日とする。レポートの構想から、添削・改稿に至る過程が本科目の指導の中心をなすので、受講者は初稿提出以前にも、担当教員と積極的にコンタクトをとることが望ましい。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	90%	論文にふさわしい構成、記述になっているか、結論に一定程度、独自性があるか、を判断基準とする。
	観察記録	10%	学習姿勢全般を評価の対象とする。
履修者への要望	<p>レポート執筆は、学位取得論文の基礎工事部分にあたる。短いレポートがしっかりまとめられなくては、学位論文執筆はとうてい覚束ない。まずは教材を、自分が主たる素材として取り上げようとする作品や言説のテキストを、それとしてしっかりと読解することが肝心である。その上で、課題、テーマを設定し、それを論証するための手順を整えた上で、必要な調査を開始する。manabaのコミュニティや掲示板など、学習ツールを積極的に活用することが望ましい。レポートの分量は特に指定しないが、5,000字程度が一つの基準となる。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 江戸川乱歩 『探偵小説四十年（上）（下）』（光文社文庫，2006年） 教材名： 上 ISBN:978-4-33-474009-2 1,143円+税 下 ISBN:978-4-33-474023-8 1,260円+税
	江戸川乱歩「一般文壇と探偵小説」（1947）によれば、大正期の探偵小説は明治期とは逆に、先ず一般文壇にその機運が動き、それを追隨する形で専門の探偵作家が生まれて来た、ということになる。だが、外国語・外国語文学に精通していた、反自然主義陣営の若手作家たちが、この時期に詳らかにした探偵小説という新ジャンルへの旺盛な関心は、それぞれの文学の目指す方向性、方法との関連において、単なる探偵小説ジャンルの先触れという以上の意味を有したはずである。「一般文壇」と探偵小説をめぐる、乱歩の発言を手掛かりに、大正や昭和の文学者にとって、探偵小説ジャンルの試みがいかなる意義を有するものであったかを考えたい。乱歩はハードボイルドにもいち早く反応して、その紹介に努めた。乱歩の紹介文を手がかりに、ハードボイルドと戦後日本文学（安部公房、村上春樹など）との関係を考察してみるのもまた面白い。
参考図書	江戸川乱歩『幻影城』（光文社文庫，2003年）ISBN:978-4-33-473589-0 933円+税 江戸川乱歩『続・幻影城』（光文社文庫，2003年）ISBN:978-4-33-473640-8 952円+税 堀啓子『日本ミステリー小説史：黒岩涙香から松本清張へ』（中公新書，2014年）ISBN:978-4-12-102285-1 880円+税
履修上のポイント	乱歩が折に触れて発した探偵小説の本質、起源、現況に関するメッセージを手掛かりに、乱歩自らが、自己の出発点であったと繰り返し記している、谷崎潤一郎など大正作家による探偵小説の試みの意義を、同時代文脈から、あるいは、ポー、ワイルドなど、この時代、大正作家たちに偏愛された外国作家の受容との関係で、多角的、相対的視点から解明していく。なお、江戸川乱歩の探偵小説論、日本探偵小説の歴史を論じた書としては、ほかに『鬼の言葉』、『悪人志願』、『わが夢と真実』などがあり、すべて、光文社文庫版『江戸川乱歩』全集に含まれているが、同工異曲の論考がきわめて多いので、教材として指定した書を中心に考察を進めていく大きな不都合はない。
レポート課題 1	谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介の作品の中から、作品構造や設定の上で、探偵小説として読めるものを一篇取り上げて、それらの作品がこの時期に書かれた必然性について、作家論、同時代文脈などとの関係で論じなさい。 留意点： 『中央公論』定期増刊「秘密と開放号」（1918）の特集《芸術的・新探偵小説》には、谷崎潤一郎「二人の芸術家の話」（「金と銀」）、佐藤春夫「指紋」、芥川龍之介「開化の殺人」、里見弴「刑事の家」が掲載されている。本レポート課題を考える上で、この特集、およびその刊行時期は、一つの目安となってくれるに相違ない。
レポート課題 2	小説の語り・筋・構造をめぐる、いわゆる「谷崎・芥川論争」（『饒舌録』、「文芸的な、余りに文芸的な」、1927）においては、いったい何がいかように議論されたのか。谷崎、芥川のそれぞれの作品、および日本近代文学のその後の展開との関係で述べなさい。 留意点： 両者の主張と論点を整理した上で、それぞれの用いている用語や概念の、ずれや重なり合いに留意することが重要である。両者が自説を補強するために持ち出している外国文学作品にも、比較文学的視点から着目する必要がある。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 野崎敏『文学と映画のあいだ』（東京大学出版会，2013年） 教材名： ISBN: 978-4-13-083059-1 2,800円+税
	映画という新興芸術は、明治期末に日本に本格的に導入されるや否や、瞬間に広範な観衆を獲得し、文学に拮抗する、その新ジャンルとしての地歩を固めていった。映画と文学とのクロス・ジャンルの交流は何を生み出し、大正期、昭和初期の日本文化に何をもたらしたのか。サイレントからトーキーへの推移は、いかなる転機でありえたのか。映画と文学の相互影響関係を、歴史的にたどることによって、1920年代、30年代日本文学の表現の、新たな位相を考察する。
参考図書	十重田裕一（編）『横断する映画と文学』（森話社，2011年）ISBN:978-4-86-405026-5 3,400円+税 岩本憲児・波多野哲朗編『映画理論集成—古典理論から記号学の成立へ』（フィルムアート社，1982年）ISBN:978-4845982424、5,800円+税
履修上のポイント	言語芸術と非言語芸術との相互関係を考察していくにあたっては、単に文学における「映画的表現」、映画における「小説的表現」を印象批評的に指摘することとどまらず、そうしたジャンル混交を成立させた時代背景、時代思潮にまで踏み込んで、メディアとの関係も視野に入れて、複線的かつ立体的に論を構築していくのでなくてはならない。文学における「映画的表現」に着目する際にも、単に奇を衒っただけのものと、文学表現の根底にまで届いているものとを、識別して論じていく姿勢が求められる。
レポート課題 1	1920年代、30年代の日本文学作品を一篇、取り上げて、その表現の位相を、映像芸術との関係で論じなさい。 留意点： 映画制作に主体的に関わった谷崎潤一郎、川端康成の作品がすぐに思い浮かぶが、この時代の作家たちのほとんどが新興芸術である映画に旺盛な関心を示しているため、より柔軟な視点からそれを論じていただいで差し支えない。
レポート課題 2	映画と文学を比較検討する際に前提となるべき、基本的立脚点、視点はいかなるものか。映画と文学の実例にできるだけ即して論じなさい。 留意点： ヴァルター・ベンヤミン、ロラン・バルト、ジル・ドゥルーズ、クリスチャン・メッツ、アンドレ・バザンなど、映像表現の本質について考察した先駆者たちの議論が大いに参考になるだろう。ロマン・ヤコブソンなど、映画と文学との間のジャンル変換を、翻訳、翻案としてとらえる立場もある。こうした議論は昨今では、アダプテーション論と呼ばれる。

基本教材 1

第 1 回	まず、江戸川乱歩「一般文壇と探偵小説」を読んで、基本的視座を獲得する。
第 2 回	乱歩の他のエッセイにも可能な範囲で目を通して、基本的視座を補強する。
第 3 回	文学史等を参照して、大正文学については基礎的知識を固める。
第 4 回	谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介の大正中期の短篇作品を読む。
第 5 回	担当教員とも相談しつつ、レポート課題 1 で取り上げる作品を決める。
第 6 回	作品を精読しつつ、必要に応じて他の作品も参照する。
第 7 回	構想をまとめ、レポート執筆に着手する。
第 8 回	レポート課題 2 については、まず文学史等を参考にして、基礎知識を固める。
第 9 回	担当教員とも相談して、物語論についての必要な知見を得る。
第 10 回	ことに佐伯彰一『物語芸術論：谷崎・芥川・三島』（講談社）は有益である。
第 11 回	東西の物語論の系譜を、担当教員とも相談して適宜参照する。
第 12 回	谷崎・芥川論争のテキストを子細に検討する。
第 13 回	構想をまとめて、レポート執筆に着手する。
第 14 回	両課題ともに、早めに初稿をまとめて、できるだけ多くの時間を書き直しに当てられるようにする。
第 15 回	最終稿をまとめて、提出する。

基本教材 2

第 1 回	序章「文学から映画へ、映画から文学へ」を読んで、問題の所在についての知見を獲得する。
第 2 回	第 2 章以下の各国の事例を適宜、参照して、上記の知見を深める。
第 3 回	日本文学史や日本映画史の類いを参照して、日本近代文学と映画との関係の予備知識を獲得する。
第 4 回	谷崎については、『潤一郎ラビリンス 第 11 巻「銀幕の彼方」』（中公文庫）が参照できれば便利。
第 5 回	川端康成については、参考文献、十重田編著の第 1 章が参考になる。
第 6 回	映画との関係で論じられそうな日本近代文学作品のあたりをつける。
第 7 回	担当教員と相談して、対象を絞り、扱う視角を定めて、レポート課題 1 の執筆準備に入る。
第 8 回	序章「文学から映画へ、映画から文学へ」を再読して、方法論についての知見を得る。
第 9 回	第 2 章以下の各国の事例を適宜、参照して、方法論についての知見を深める。
第 10 回	担当教員に相談して、方法論、理論について、さらに参照すべき文献についての示唆を得る。
第 11 回	担当教員と相談しつつ、例証に用いる文学作品の見当をつける。
第 12 回	作品、資料を読み込んで構想をまとめる。
第 13 回	レポート課題 2 の執筆準備に入る。
第 14 回	両課題ともに、早めに初稿をまとめて、できるだけ多くの時間を書き直しに当てられるようにする。
第 15 回	最終稿をまとめて、提出する。